

詩人黄瀛の光栄一書簡性と多言語性一

岡村, 民夫

---

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

(1)

(終了ページ / End Page)

(27)

(発行年 / Year)

2009-01-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003623>

## 詩人黄瀛の光采

— 書簡性と多言語性 —

岡村民夫

## 一 伝書鳩の權威

一九〇六年一〇月四日 四川省重慶市に生る。

幼時、父を喪ひて以来、北平、天津、青島、東京等各所に転々す。

青島日本中学校を経て、文化学院に学び、後、陸軍士官学校卒業。

かつて、中隊長、參謀本部部員、現在、軍政部特殊通信教導隊長。

以上は、黄瀛<sup>コウテイ</sup>の第二詩集『瑞枝』(一九三四)の巻頭に、軍服姿の「著者近影」とともに掲げられた「小伝」全文である。つまり「僕を全く知らないで此の詩集を手にする人へ、敬意を表するために」(同書「後記」)詩人がしたためた自伝であり、半ば作品的価値がある。

伝記的観点から補足すれば、彼は、重慶の川東師範学校初代校長だった中国人の父・黄沢と、日本人交換教員の母・太田喜智とのあいだに生まれた、中国国籍の長男である。日本語は一九一四年に千葉県の八日市場尋常高等小学校に入学してから本格的に学び、準母語となった。中等教育は、東京の正則中学校と青島日本中学校で受けた。日

本語で口語自由詩を書きはじめたのは正則中学校時代、十六歳頃という。一九二五年十八歳にして、詩壇の登竜門「日本詩人」に投稿した作品により新詩人第一席の栄誉を受け、詩人黄瀛は一躍脚光を浴びた。一九二六年、青島を離れ、東京の文化学院に入学するが、一年ほどで自主退学し、一九二七年十月、市ヶ谷台の陸軍士官学校本科へ第二十期中華民国留学生十五名の一人として入学した。一九二九年七月に士官学校を卒業すると、中野電信隊中隊長に配属された。北伐を敢行する蒋介石に共鳴し、満州事変直前の一九三二年初頭、中華民国新首都・南京へ渡った。「小伝」が「参謀本部部員」「軍政部特殊通信教導隊長」と暁して表現しているのは、国民党陸軍のそれなのだ。

黄瀛は日本陸軍でも国民党陸軍でも通信に関わり、とくに軍用伝書鳩の養育係を務めた。この逸話は、彼の文学を考えるうえでとても示唆にとんでいよう。文化学院で黄瀛を教え、以後互いの家を訪問しあうほど親密に黄と交遊した中国文学者・奥野信太郎は、南京から東京へ種鳩の購入にやってきた教え子との再会を回想し、こう述べている――

その頃から彼の胸裡には、やさしい鳩が巢籠つてゐたことであつたらしいのだ。彼はわたくしの問いに對して昂然と、自分はいまだは中国に於ける軍用鳩の權威であると言ひ放ち、もつとも自分一人だから当然だと声に出して笑つたのであつた。鳩の權威か、それに非ざるかは問題ではない。ただ黄瀛が鳩を撫するといふだけで十分なのである。南京から詩を愛する中国の青年将校が、通々東京まで鳩を購求する役目を自ら買って出てきたといふそのこと自身が、すでに幾何かの詩情を湛へて、人の心に訴へるものあらしめる。況んや黄を知る者が直接黄の口からその話を聞くことに於てをや。わたくしをして甚だしく愉快ならしめたのは勿論であつた。

(奥野信太郎「詩人黄瀛のこと」)

「ある朝ある姿」のなかで、黄瀛は「吉林の友人へやるはがきを書きをへる」自身の姿を描いたのち、飼っている鳩についてコメントする――

動かない天から鳩の羽毛がちら／＼おちてくる

オレは唯耳かたむけてゐる

それはあるひは雀の鳴き声かも知れない

午前一回の運動飛翔をする当歳の鳩群は雲に隠れた

(中略)

オレの鳩車くまでは二十羽のあいつがのどをならしてゐるだらう

鳩は平和のシンボル、雄々しき武装者!

オレは? オレの標語を思ひ出さう

オレは冬のひやりとする風を感じてはゐない

となりの電信隊の物音をふりはらふ

動く姿勢を示すために立つ

作業服を身につけて、オレの鳩車へ――↓

オレは回転椅子に身をぐるりとひるがへす。

(軍用鳩調査委員事務所にて)

これは、黄が自分は伝書鳩に似ていると自覚していたことを示す一種の換喩であるといえる。伝書鳩に類似したモチーフは、詩「鷗」にも見いだされる。そこでは日本から大連の港へ向け「支那海」を航海する船の水夫長の口を通して、船に随行する対馬生まれの鷗、大連の「一晚中あの煙の空、透明な空を飛びまはり／しまひには羽根や眼がよわつて／旅先でもろくも墜落惨死する／夷に可愛さうな鳥」が、「詩的な鳥」と讃えられている(ポードレーの「信天翁」を思わせなくもない)。

一九二三年、青島日本中学校の黄瀬が、「詩聖」誌上で知った草野心平へ「いったいあなたは中国人なのでしょ

うか日本人なのでしょうか」とたずねる手紙を出したことをきっかけに、二年後「銅鑼」は生まれた。一九二五年、東京で高村光太郎の彫刻のモデルをしていた黄は草野を彼に紹介した。同年、草野と黄の連名による勧誘の手紙によって、岩手県花巻の宮沢賢治は「銅鑼」同人となった。そして黄は、一九二九年、花巻の実家で病床にあった賢治を訪ねることで、草野と賢治の関係をさらに強めた。淋しがりやで社交家で筆まめな混血詩人は、諸々の境界を越えることの達人、一流の媒介者だったのだ。

黄の媒介者性は、日本語と中国語の境界をめぐることも確認できる。日本語と中国語の二言語を併用する彼は、当時の中国詩の日本語訳を、「銅鑼」「詩神」「若草」「詩と詩論」「改造評論」といった日本の文芸誌に掲載し、上の魯迅に賢治の童話を紹介した。大陸の文人たちと間接・直接の豊かな交通がなければ、なせることではあるまい。

詩作においても彼の媒介者性は顕著に認められる。彼は日本語で詩を発表することを通して、日本の詩人たちとのネットワークを積極的に広げ、温めていった。書簡とは贈与の一種だが、黄瀨には、折に触れて友人に即興詩を贈る習いがあったらしい<sup>[1]</sup>。詩作と交友の分ちがたさ——それが日本語の選択や習熟というファクターと深く結びついている。つまり、彼にとって、詩を書くとは、意識するとしなやかにかかわらず事実として、そのつど自己と日本語との默契を再確認し、日本語を〈友愛の言語〉として創りなおす試みを意味したはずである。

日中戦争のあいだ筆を折っていた黄瀨は、日本の敗戦後、再び日本の文芸誌に詩や随筆を送るようになり、国民党少将としては、何応欣秘書を務めつつ、中国に抑留されていた草野心平や山口淑子(李香蘭)の帰日に尽力した。ところが、蒋介石が台湾に敗走した一九四九年、黄瀨は共産党軍に投降し捕虜となり、一九六二年までの十三年間、獄中生活や労役に服す。出獄したのも束の間、文化大革命により一九六六年再度逮捕され、十一年半入獄する。越境を身上とする詩人がかくも長きにわたって翼をмоがれたとは、悲劇というほかない。

文化大革命の終焉と開放政策により、ようやく黄瀨は一九七八年七十二歳に至って出獄すると、四川外語学院の日本語・日本文学の教師の地位を得、日本の旧友たちへ繁く手紙を書くようになった。一九八二年、『瑞枝』が復

刻された。一九八四年以降、彼は五度、再来日する。黄瀛の存在が再び日本人の耳目を集め、一九九四年には佐藤竜一による評伝『黄瀛 その詩と数奇な生涯』が上梓された。二〇〇五年七月三十日、彼が生まれ故郷重慶で九十八歳で亡くなると、二日後「朝日新聞」は計報を掲載した。しかし、再評価はまだ端緒に着いたばかりといわなくてはならない。黄瀛の希有の詩業を正面から論じた論文は、皆無に等しい。この沈黙は、身近な他者の存在に鈍感であるという日本文学の弱点ばかりか、私たちの日本語への愛の薄弱さを静かに告げていよう。

## 二 日付のある恋

黄瀛が生前に世に問うた詩集はわずかに二冊、一九三〇年に限定百部で自費出版した「小さい可愛い詩」の「小さい可愛い詩集」(『詩集』景星)後書)と、一九三四年にボン書店から出版された豪華な箱入り製本の『瑞枝』。いずれも文化学院出身の吉田雅子の装丁による。文化学院生時代、盛んに黄がラブレターを送り、上野動物園でデートしたという女性だ(黄には上野動物園に取材した動物詩の連作がある)。「瑞枝」の出版をめぐるのは、さらに大規模で複雑な友愛の交換があったと思われる。黄の「後記」によれば、『瑞枝』は、彼が中国に発ったのち、日本の「多くの友人の労を煩はし」て成った詩集であり、近作のほか、「多くの友人の希望」によって旧作を収録している。しかも、高村光太郎の「序」と、木下杢太郎の「詩集『瑞枝』の序に代へて 作者黄瀛君に呈する詩」という書簡体の序詩を冠する。出版に至るまでに、海を越える鷗さながらの手紙のやりとりが、さぞやあったことだろう。

そして私がここで特に強調しておきたいのは、友愛や親愛の手紙に通ずるものが、黄の個々の詩篇の核心に存在するということである。奥野信太郎はそれを的確に指摘している——「彼の書翰がしばしば詩であるが如く、また逆に彼の詩はしばしば好朋友へのなつかしい書翰でもある。決して公開状ではない。／書信は必ず個人的な対者を必要とする。公開状は対者を必要としない。彼の詩は、たとへ未知の人が読んでも、自分だけに送られた感じが濃厚である。読者の心を和らげられた上、それ以上の何ものかを、感銘させてゆく彼の詩の秘密は、蓋しその私信の

親しさに潜んでゐる」(「詩人黄瀨のこと」)。

私たちは奥野の実感を分析的に捉えなおしてみよう。まず、筆まめな詩人の詩のなかに、自身が書く手紙や、友や肉親からの手紙への言及がたびたび登場するという事実を指摘できる(「短章」「朝のよろこび」「ある朝ある姿」「狂暴なる伊想」「夜明けのバラ／＼雨」「ベットの中で」「十四号のサノリへ送る詩」「妹への手紙(1)」「妹への手紙(2)」「マカオ小景」等)。

第二に、「君」や「あなた」「お前」等の二人称、つまり親密な二人称の多用や、命令形や呼びかける口調の頻用を指摘することができる。例えば、詩人は東京市中から「日本東京市外和田堀町和泉二四三」への転居を、天津に暮らす妹・黄寧声へこんなふう<sup>1)</sup>に報告する——「移つたところが遠いので／お前のところへ上げるたよりも／何だか他人らしくなりさうだが／そんなことはゆるしてくれるだらうね」(「妹への手紙(1)」。親しげな呼びかけ口調は、人間だけでなく、自然にも及ぶ——「梢さん、梢さん／雪でも降りさうな天から／またもやつて来たね、氷雨の光り」(「氷雨の夜 Nocturne No.4」)。

宛先、署名、日付といった類いの記号も黄瀨詩に欠けていない。年号(西暦であるという特徴がある)、月日、日時、地名、人名などが頻出するのだ。これら書簡的記号、ことに日付や時刻は、人間関係や出来事の親密さや特異性の指標となるとともに、同時にそれが大きな現代史、とりわけ日中の政治関係にじかに隣接したはかないものであることを暗示している。日付の裏には、歴史に翻弄されるおのれの人生の予感がある。

陸軍士官学校留学生となつてまもない二十一歳の詩人は、「天と地とが刻々に迫られてゐる、十二月の寒さ」を感じながら、自習室の南面の窓の白いカーテンの影から暗い市ヶ谷の夜景を眺めている。

梢さん、梢さん

あゝもうとつぶり暮れた一九二七年の日本

やつは過ぎ去つた遙か市街を越えて

私はその後に来る寒さを待つてゐる

思念がやがてあやしい寶石のやうに光るのを

そして季節の匂ひがふんと鼻に来るのを

安らかさというく

身に迫る烈しさというく

くるクリスマス夜の暖い夜を考へ

この寒さがあなたにもめぐることを考へ

これからまた赤と青との戦争ごつこの私の仕事を初める前に

〔氷雨の夜 Nocturne No.4〕

「やつ」と呼ばれているのは、いましがたまで降っていた氷雨。「あなた」と呼ばれているのは、はっきりしないが、恋する女性だろうか。自習室の窓は寒風から詩人を保護しているが、詩人は外部の氷雨の移動や、寒気の接近とともに、「戦争ごつこ」が身に迫っていることを感受している。「赤と青との戦争ごつこ」は、中国共産党の赤旗と国民党の青天白日旗を意識した表現だろうか。「あなた」への呼びかけは、個人を越えた歴史の荒波に取り囲まれているせいで、かえって親密なトーンを強める。

日中関係が悪化している。一九二七年三月には北伐軍の南京入城に際し、日米英等列強の在南京民が襲撃された第一次南京事件（南京暴動）が起き、五月には第一次山東出兵に至る。また四月には、共産党による上海の臨時政府に対し蒋介石がクーデター（白色テロ）を企て、国共の関係も悪化していた。「一九二七年」や「十二月」という日付は、何かが去り、別の何かがまだ来ないという危うい静寂、一時的均衡、つかのまの休息、過渡的な滞在と結びついているのだ。実際、翌一九二八年に入ると、日中関係をさらに悪化させる大事件が起きる。第二次山東出兵と、済南事件（山東省省都・済南の日本人十二名が蒋介石の命によって処刑されたこと）に対し、日本軍がこの省



都を制圧した事件)である。山東省における日中の武力衝突が、青島で中学時代を送った黄瀨にとって、とりわけ心を苛む出来事であったことは想像に難くない。

黄瀨は「各所に転々す」才能に恵まれているものの、行動の詩人ではない。室内はこの詩人にとって特権的なトポスである。「日本詩人」一九二五年二月号で「新詩人第一席」の栄誉に輝いた出世作「朝の展望」(詩人は青島日本学校寄宿舎の窓を磨きながら、青島の街を眺めている)をはじめ、多くの詩が室内を舞台や視点としている。窓は外部を絵画か影絵のような映像に変え、壁や天井は記憶を投影するスクリーンとなり、詩人は静かな室内で独り内省しながら手紙的な詩を書く。それらは奥野信太郎のいうとおり、「公開状」的なものではない。私淑した高村光太郎や親友の草野心平の詩と異なり、述志の詩、主張したり告発したりする詩ではない。けれども、彼の詩を政治や歴史に無関係な私的叙情と見なすとすれば、その魅力や価値の半分を捉えそこねることになる。室内の詩人は、巨大な外部の響き(風雨、雷鳴、鳥や犬の声、足音、喇叭、夜汽車、汽笛、都市の騒音……)に聞き耳を立てている。季節の知らせは、自然の永遠の反復よりも、歴史とそれにもなう自己の身分の変転と結びついている。詩人の耳は〈時〉を聴く。

ふる／＼ふるふる犬のやうな胸ふるひ

消えて行つたやうな友人を呼ばうかしら

一九三〇年の寒い風の窓

重量を忘れてしよんぼりしてるオレ

カアテンをしぼれば小さな世界

つくねんとした灯にぼつちり暖かい気もちを所有する

今まで考へなかつた事で虚空をつかむ

冴えた眼で悲しい影絵を見乍ら泣きつ面をする

泣ければいゝのに

泣けない泣きつ面をしてる

(窓を打つ氷雨)

一九三〇年末、中野電信隊時代、またしても詩人は窓辺に佇んでいる。明示されてはいないが、数ヶ月前に第一詩集『景星』を出版しており、まもなく国民党の新都南京へ旅立つことになる青年は、中国の激動と悪化の一端をたどる日中関係をめぐり「泣けない泣きつ面」をしていたと推量できる。つまり彼がふるえているのは、東アジアの歴史の寒さなのだ。「一九三〇年の寒い風の窓」とは、詩の生成する小さな内部空間を画すると同時に、それを歴史へ接続する文学的分節装置である。

『瑞枝』においてこの詩の直前に置かれた「新嘗祭の夜 Nocturne No.3」は、タイトルや「格納庫」「この第七寝室」等の語から、一九二七年十一月二十三日(昭和に改元されてから最初の新嘗祭)の士官学校寄宿舎における、眠られぬ夜の感情を、時々刻々と記した詩であることがわかる。その第六連――

――十時二十五分過ぎ

安らかに死んでしまへ!

夜は寒さで寝室の白亜の天井が悲しいフィルム

僕はまだ眼をつぶり乍ら眠れないんだから情けない!

僕は歴史を考へてる、僕自身の今日一日の日誌を

いや、それよりも死にたい、このかなしい世界から

「歴史」は「僕自身の今日一日の日誌」に還元されているが、それでもやはりそれは「歴史」であって、「このか

「新しい世界」の全体から切り離すことができない。詩人の孤独な不眠の夜が、大きな歴史に関係していることは、「新嘗祭の夜」というタイトルからも明らかである。

### 三 アヒノコの吃音

風景に関して黄瀛的なものはなにか。横浜、神戸、青島、天津、上海、大連、マカオといった港湾や租界ないし租借地の風景、すなわち様々な国民や様々な文化が共存し混合した国際的都市の風景である、という答えになろう。黄瀛はこの種の都市風景を扱った詩のなかに、エキゾチックな風物ないし語彙をキラ星のごとくちりばめている。例えば、青島を「伊太利のやうなこの町」と形容する「朝の展望」における「ミツシヨンスクール」「胡藤アケシヤ」「朝鮮

鳥」「督辯公館」……。あるいは天津の日本租界を回想した「喫茶店金水——天津回想詩——」における「アイスクリームやソーダ水」「電影」「白河川岸ベリナ」「フランス花園フレンチ」「白いプリンソーダ」「朝鮮の美しい女」「アメリカの無頼漢兵士ミ」……。

「わたくしは彼の詩に、青島の海のいろと空の光とが明るく大きな花びらのやうに、いつも楽しく揺れ動いてゐることを看取しては、それが青島生活の彼に与えた此上もない強い影響であり、殊にその生活が、最も感受性に富んだ少年の日のそれであつたことに帰属せしめてゐる。彼の第一詩集『景星』を繙く者は、中国といふ古い大陸の一角に鏝められた一つの寶石にも比すべき、ヨオロッパ風の都会青島を極く身近かに感じて、その植民地的香気の立ちもとらふのを、新鮮なレモンの匂ひのやうに思ひなすことであらう」（奥野信太郎「詩人黄瀛のこと」）。青島生活以外に、『瑞枝』『小伝』に銘記されているやうに黄が幼い頃から中国国内を転々としていたことも重要な与件だろう。いずれにせよ、こうしたモダンで明るく爽やかなエキゾチシズムこそ、黄の詩が早くから好評を得た要因と見てさしつかえあるまい。

しかも、日本的なものに対して、西洋的なものや中国的なものがエキゾチックなだけではない。日本人の視点と

中国人の視点を兼備する黄においては、日本的なものもエキゾチシズムの構成要素となる。日本語で詩が書かれていようとともそうであること、日本語がコスモポリスという環境で放つ新鮮な香りを確認するには、次のような詩行を引けば十分だろう。黄がしばしばひらがなやカタカナを過剰に用いて日本語を表記しているのは、意味に還元されえぬ語音を強調するためといえよう

今日、町は非常な日光浴だ

寒い風も吹かないし

少ししめつた道路は春の土色だ

僕は自転車ケツに妹をのつけて

日本租界の方へ行つたら

春が来たなんて日本の子供がうたつてたつけ

〔早春〕

あいつの背中はたくましい馬だ

ハタ……タコ……コマ……ハト

アメガフリマスニホンヘアサツテカヘリマス

あいつの背中はこつちへひるがへる

〔あいつの背中へ書いた詩〕

多文化的な都市こそ、混血児黄瀛の身体にいちばんしっくりなじむ環境であったはずである。もちろん、彼がそうした風景の底に悲哀を感じていたことは、しっかり押さえておく必要がある。青島をあとにした十九歳の黄

は、降り立った神戸港で見かけた混血の少女をこう歌っている――

白いパラソルのおかげから

私は美しい神戸のアヒノコを見た

すつきりした姿で

何だか露にぬれた百合の花のように

涙ぐましい処女を見た

父が――

母が――

その中に生まれた美しいアヒノコの娘

そのアヒノコの美しさがなしかつた

(七月の情熱)

混血の少女に対して彼が感じた「かなしさ」が、混血児としての彼の自覚や経験からくることは明らかである。けれども、文化的混交や混在が、望ましくならぬ混乱や侵略として告発されているわけではない。彼にとって「アヒノコ」は美しく、「七月の情熱」をかき立てる。文化的混合に官能的なポエジーを感じるのが黄なのだ。

また、黄は自らの混血性に悩みながらも、根底ではそれをかけがえのないアイデンティティーとして肯定していたと思われる――「これはこゝでおしまひになるものだと自覚する／オレの出発はこゝから始まる／それならばX光線で見透かされたオレのみすぼらしさは？／――いや、いや、歴史は光輝ある名替／古めかしい匂ひのまゝでいゝ」(「われらの Souvenirs」)。士官学校卒業を控えた一九二九年五月の作と思われ、過去の人間関係からある種の訣別を暗示的に宣言しながらも、自己の悩ましい出自を光輝ある歴史的運命として受け入れ、主張しようとしてい

ると解釈できる。

一九二八年一月に書かれたと推定される「妹への手紙(2)」には、「妹よ、国境ほど私を惹くものはない／局部的にふるへてる私達の国／『国を思ふと腹が立つ』この言葉にこゝの国の芸術家は不健康な嘲笑をするのだ！」という詩行が記されている。この「国」とはこの国か。同じ詩のなかに出てくる「この国の陸軍始の観兵式」の「この国」は明らかに日本を指している。しかし、「私達の」と黄蘆声を含めていうときの国や、「国を思ふと腹が立つ」というときの国とは、「こゝの国」と対比されており、中国のことだろう。そして「こゝの」と日本の陸軍士官学校に在籍している詩人がいう国は、日本だろう。詩人は中国を憂う発言を嘲笑する日本の芸術家に腹を立てているが、中国の現状にも腹を立てている。そして、国境の一方の視点に決定的に身を移すことによってジレンマを解消しようとするのではなく、あくまで国境上に身を持そうとする自己を確認している。

そう解釈すると、士官学校の冬休みに見た「ヴォルガ・ボートマン」を、「いゝ写真だった！／お前も機会があったら見るといゝ」と妹寧声に薦めていることがいっそう意義深くなる。ハリウッドのセシル・B・デミルが一九二六年に監督し、一九二七年十月に「ヴォルガの船唄」という邦題で封切られ、公開後に検閲による削除を受けたというこの映画 (*Volga Boatman*) が、ロシア革命初期の内戦を背景とした恋愛映画だからである。主人公のフェオドル青年は、ヴォルガ河の船人であるとともに、反乱する民衆側のリーダー。ヒロインの公爵令嬢ヴェラには、反乱鎮圧の命を負った白軍近衛士官の許嫁デIMITリがいる。美しく優しいヴェラに一目惚れしたフェオドルは、彼女を処刑すべき場面で、同志たちの目を欺き逃がす。最終的に、フェオドルたちに捕らえられた許嫁は、革命裁判所で死か国外追放の選択を迫られ、後者を選び、主人公とヒロインは結ばれる。黄蘆は映画の中の白軍と赤軍の闘いを、国民党と共産党の闘いや、中国と日本の闘いに重ねつつ、複雑な思いで見ただけではある。

日本人と中国人の友人を増やしていくことで、彼の孤独が癒されることはあるまい。彼を媒介者たらしめる境界性そのものが、日本人からも中国人からも理解されたい彼の孤独をかたちづくっているのだから。

ところで、さきほどからすでに私たちは〈言語の境界〉という問題に足を踏み入れている。「ここに方言、ここ

に郷土の倍音、／一瞬に消える影、二度と思ひ出せぬ句、／それが此邦の人より鋭く、／深く、柔らかく、痒く、また些と酸っぱく、言語、韻律の微かな網に捉へられて居る」(詩集「瑞枝」の序に代へて 作者黄瀛君に呈する詩)と木下李太郎が評しているように、黄の詩は非常に多言語的である。

ベースとなる日本語のなかに、中国語、英語、ドイツ語、フランス語などが頻繁に導入され、さらに中国語と日本語に関しては、様々な方言や俗語も援用される。こうした多言語性は、漢字、カタカナ、ルビ、アルファベット等の姿をとり、書字上の複雑さや多様さ、表記のにぎやかなヴァリエーションと重なりあう。中国語の歌を漢文で引用した「享利飯店にて」「南から来たお客の詩」、英語の俗謡をアルファベットで引用した「水雨の夜」、モンゴル語の古歌を語釈なくカタカナで引用した「nocturne」といった大胆な例も存在する。アメリカやフランスの映画の題名や俳優名が、カタカナやアルファベットで引用され、国境を越えた情動的コミュニケーションの記号となる。多言語性は、黄のエキゾチズムが表面的なものでなく、詩の肉体にまで浸透する本質的要素であったということを証していよう。

詩人が愛した青島や天津とは、まさに西洋と東洋の諸言語が飛び交い、多種多様な文字表記が街頭に氾濫する巷である。国際都市における諸言語の聴取は、屋外からの音声や夜の音声の聴取とともに、黄瀛文学の潜在的な基層をなす〈耳の記憶〉であったに違いない。

文学における多言語性という次元でとりわけ貴重な点は、黄瀛においては、日本語そのものが、他の言語との接触を通して自らの表情を積極的に変容させていると思われることである。萩原朔太郎はその語韻上の音楽性を評価し、むしろ外国人であることが有益に作用したと推定している。

君が表現に卓抜な天稟をもつてゐることは、以前からも認めてゐたが、今度の支那景物詩「喫茶店金水」をよんで、その語韻上の音楽的天稟に始めて気付いた。君は実に音楽的な好い耳を持つてゐる詩人だ。

あの日本租界の富貴胡同近くで

フネフネといはれた夏の夜は

よくアイスクリームやソーダ水をすすつたものです。

といふ書き出しを読んでも、すぐにそれがわかる。「フネフネ」といふ語の鼻音的な発韻が、いかに美的によく利いてるか。それから三行目で「よく」と言ふべき所を故意に「よくく」と言つてるのを見て、語調の節奏的美観に神経の過敏なことがはつきりわかる。(中略) いったい外国人といふものは、他国語に対して非常に鋭敏な耳を有するものだ。たとへば日本人は、フランス語や英語に対して、それらの国民自身が感ずるよりも、遙かに音楽的の語韻を強く感じてゐる。黄君が日本語に好い耳を有してゐるのも、思ふに恐らく彼が外国人(支那人)のためであるだろう。

(「日本詩人九月月号旦」、「日本詩人」一九二五年十一月号)

日本人がフランス語や英語に対して非常に詩的な耳をもっていると断言や、黄と日本語の関係を、日本語を学ぶ外国人一般のそれに還元する単純化など、突っ込みどころはあるが、黄の詩の音楽性を彼の外国人性と関連づけて具体的に語った同時代評として貴重であるばかりでなく、「喫茶店金水」を引いている点が私たちにとって興味深い。というのも、この詩は、天津の日本租界で車夫たちが投げかけた「フネフネ」という語音が、何を意味しているのか「どうしてもわからなかつた」という、植民地都市的な〈耳の記憶〉に基づき、その「フネフネ」(それにしても何だろう)を印象的なリフレインとして記したものにほかならないからだ。

「銅鑼」同人だったアナキスト詩人・小野十三郎は、晩年、黄との文学的方向性の違いを断りながらも、特異な日本語使用に魅せられていたことをこう述懐している——「黄君の詩の魅力は、私にとつては、同時代の他の詩人には見られなかつた新鮮な言葉の行使であつた。黄君が詩を書くときの言葉の異常な屈折はちょっとまねができ



(16)

ないもので、私はそこに強く牽かれていたのである」(「黄君の日本語」)。「新鮮な言葉の行使」とか「言葉の異常な屈折」というのが具体的に何を指すのか小野の短いエッセイからははっきりしないが、李太郎や朔太郎が触れている音韻やリズムよりも、むしろ語法やシンタクスの特異性を語っていると解釈したい。思いあたるのは、文的にはまちがっていないが通常は言わないぎこちない構文が、かえって表現としての強度をもたらしているというケースである。例えば――

今はもう君に自分ははつきり見えまい？

自分の貌が君の心中にないのは勿論のこと

夕方近い君の世界にも、僕の考へてる世界にももうすぐ灯が入る

そして雪は恐らく今日も一つの風物として自分の愛望にすぎなかつた！

(「点火時の前」)

オレは君を知らない人にする

夜が明ければあの胸にくる青葉の匂ひは

オレをめぐつてふりかへるをすら出来ない……

(「夏の白い小さな花よ!」)

以上二例とも生硬な翻訳調の構文が、詩人と二人称の女性との距離の問題と相関することで積極的な意義を獲得しているが、こうした屈折は黄瀛詩の特色のひとつに挙げられるだろう。李太郎のいう「些と酸つぱく」とはこれかもしれない。

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリは、外国語との政治的緊張をはらんだ関係から生ま

れるエクリチュールにいちはやく注目し、その機微を見事に定式化していた。

われわれはカフカ、ベケット、ゲラシム・リユカ、ジャン・リュック・ゴダールを繰り返し引用する。彼らが、多かれ少なかれ、ある種の二言語併用の状況にあったことに気づく。チェコのユダヤ人であるカフカはドイツ語で書き、アイルランド人ベケットは英語とフランス語の両方で書き、リユカはルーマニア出身、ゴダールはスイス人たろうとする。(中略)ブルーストは言っていた。「傑作はある種の外国語で書かれる。」それはどまることと同じなのだが、単にパロールにおいてどまるばかりではなく、ラングにおいてどまることによってである。外国人であること、しかし、単に自国語ではない言語を話す誰かのようにではなく、自分自身の言語においてどまること。二国語あるいは多国語を用いるものであること、しかも地方語、あるいは方言とは関係なく、唯一の同じ国語において、私生児であり、混血児であるが、人種としては純粹であるというふうになる。こうしてスタイルは言語となる。こんなふうにして言語は強度的となり、価値や強度の純粹な連続体になるのだ。

(ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『千のプラトー』)

二言語併用者・黄瀬の文学を考えるうえで、非常に示唆的である。彼が日本語を話すときどもったということ、草野心平ほか数人の友人たちが書き残している。また、四川外語学院で彼から日本語を教わった宋再新によれば、彼の中国語会話も相当奇妙なもので、標準中国語、四川方言、日本語がチャンポンになっているという<sup>(3)</sup>。しかしながら、彼は日本語で詩を書くことによって、言語と自己との不安定で偏倚した関係をスタンダードなものへと修正しようとするよりも、それを特異な表現力をもったスタイルへ転化することに努めたのだ。彼は自分のパロールにおける吃音を、詩のなかで再現してはいない。吃音は文体の次元へ超越し、日本語の強度的使用としてすっかり生まれ変わっている。だから、彼の日本語への愛はナシヨナリズムにつながるどころか、メジャーでスタンダードな日本語への抵抗と表裏一体であるといえる。そして諸外国語や方言が詩を損なうことなく詩のなかで共存している

のは、境界上でマイナー化した孤独な「自分自身の言語」こそが、異言語を排除せず欲待し、異言語どうしを媒介する〈友愛の言語〉たりえるからなのだろう。別の言い方をすれば、彼の詩は、搾取や差別や陰謀に満ちた植民地都市に潜んでいた〈ユートピア的なもの〉を救っているともいえる。

通常の意味伝達のための言葉、すなわち皆が行く公道のような言葉に満足せず、無関係に見える言葉どうしのあいだに、曲折した小径や、密かな地下道、空路や海路のようなものを発見する者。それが詩人の定義であるとすれば、黄瀨は、中国人であるとともに日本人でもあるという出自の責任をとり、境界に引き裂かれた我が身を積極的引に受けることを通じて、詩の本質に触れた詩人である。彼にとつて詩を書くことは、日本語と中国語のあいだに伝書鳩を飛ばす枝を意味する。詩の多言語性自体が書簡性を含んでいるのだ。

では、『瑞枝』の巻末に置かれた詩「天津路の夜景——青島回想詩——」を、私たちはどう受け止めればよいのだろうか。「きうくつな学校」すなわち青島日本中学校から逃れ、さらにドイツ的な「バタクさい」町並みからも逃れて、伝統的で民衆的な中国人街である天津路に入り、少年は安堵感を覚える。「天津路」という地名には、母と妹が暮らす天津への思いが込められているかもしれない。そのささやかな料亭に入った詩人は、この詩をこう結ぶのだ——

一ばいの蘭茶に

あの東洋的な天津路の夕景を

ぐつと心の中にのみいれて

自分は中国人だといふことを無上の光栄に思ふた

(18) これは、多文化性から逃れ、自身の二重のアイデンティティーにけりをつけ、中国人としての単一なアイデンティティーを選択したという宣言に聞こえないだろうか。詩の配列が制作年順にはなっていない詩集のラストにこの詩

句があるのだから、余計そう考えたくなる。詩のタイトル中の「的」の用法も中国的である。しかも「光栄に思ふた」の「光栄」には、「黄瀛」という名前が埋め込まれていると思われる。

黄瀛は自分の名に特別なこだわりを抱いていたに違いない。『瑞枝』の詩中に「黄瀛」の文字は登場しないが、この名前をモチーフにしたと思われる詩行が存在する。「きいろいろ壁の前でオレは眼をつぶつてゐる」(八月の夜)とか、「もう、星天ときいろいろ壁の絵は見飽きた!」(「N」から「N」へ)いうかたちで。中国文化において黄は高貴な色であり、黄土地の色、ほとんど中国自体を象徴する色である。けれども、これらの詩においては、うっとおしく自己を取り囲む壁の色とされている。『瑞枝』の表紙、背表紙、裏表紙に見られる波状の黄土色の文様は、「黄瀛」の字義である「黄色い海」を表象しているよう。海、黄海、シナ海はしばしば作中に登場するトポスにはかからない。「森がくれて海となる／海の中の一人となる」という詩行からはじまり、「きいろいろ壁の前でオレは眼をつぶつてゐる」で締めくくられる「八月の夜」は、まさに「黄瀛」の名前を暗号化した作品といえる。「黄瀛」という名前は、彼にとってイメージの発想源であったばかりでなく、絶えず身につきまとう厄介な問題、詩人としてのアイデンティティーを問い返す問いでもあったに違いない。日本語でいかに勝れた詩を書こうとも、彼が中国人であることは、この名前から一目瞭然だ。しかも、一般の日本人は、「瀛」の字を読むことも、書くことも、理解することもできないとくる。彼は自分の詩に署名するつど、なぜ日本語で書くのかという根本的な問いに直面せざるをえない立場にあったはずである。

しかし、天津路の一杯の蘭茶に味わった中国人たる喜びがまったく真実なものであったとしても、その特権化に留保を加える表現的特徴を複数指摘することができるのだ。「青島回想詩」という副題は、この感慨が現在のそれではなく、特定の過去のそれであることを明示している。「瑞枝」という書名は、日本の詩歌の原点である「万葉から一寸借用した」(後記)ものである。「中国人だといふことを誇りに思ふた」でなく、「中国人だといふことを光栄に思ふた」となっている点もニュアンスに富んでいる。「光栄」の思いとは、褒美や評価を他の上位の存在から贈与された場合に受け手が感ずる感情である。とすれば「中国人だといふことを光栄に思ふた」のは、自分が

完全には中国人ではないからだろう。また、中国音で「グワンロン」となる「光栄」が、中国音では「フアンイン」となる「黄瀛」と重なるのは、あくまで日本語における音読みにおいてであるという点に注意しなくてはならない。この詩が中国語訳されたら「光栄」と「黄瀛」をつなぐ小径は消えてしまう。黄瀛の境界的アイデンティティーとは、「コウエイ／フアンイン」の境界が彼の一身に刻印されているあり方に相当する。

結局私は、「自分は中国人だといふことを無上の光栄に思ふた」が詩集全体の結句に選ばれたことを、日本と中国のあいだの境界的アイデンティティーを保ちつつ自分は激動の中国で生きる、という困難な決意の密かな表明として読む。

#### 四 宮沢賢治とのリスボンズ

陸軍士官学校による北海道への卒業旅行の帰路、宿泊のために立ち寄った花巻温泉から黄瀛が、結核により自宅で臥せていた宮沢賢治を訪ねたのは、これまで一九二九（昭和四）年の春といわれている。おそらく、黄の賢治追悼文「南京から」〔宮沢賢治追悼 一九三四年〕の冒頭「一九二九年の春、学校の卒業旅行が発表された時、私は随分よろこんだ。（中略）私を惹いたものは宮沢賢治君の存在だった」という文が典拠となっているのだろう。しかし、この文は、卒業旅行で花巻温泉に寄るといふ情報を黄が知ったのが一九二九年の春であると語っているだけで、花巻温泉へ行ったのがこの年の春だったということまでは語っていない。そんな懸念を抱いていた私は、花巻温泉について調べていて、黄の来花時期の修正を迫る決定的資料に気がつき、そのことを二〇〇八年『イーハトーブ温泉学』のなかで書いた。「花巻温泉ニュース」（花巻温泉株式会社が戦前出していた月刊タブロイド紙）一九二九年七月号の「温泉たより／往来」という見出しの記事中に、「本年は修学旅行団の来泉が非常に多くなり六月に來たのは県外では秋田の土崎、亀田、旭北、池月、鷹巣各小学校、東京陸軍士官学校、支那留学生」とあるのだ。「東京陸軍士官学校」とのあいだに読点が打たれているが、「支那留学生」というのは士官学校の中国人留学生を指

しているはずである。翌年の七月号には「陸軍士官学校中華民国留學生は昨年も来泉したが本年卒業すべき八十六名は（中略）五月二十九日花巻温泉に一泊した」とある。黄瀛が宮沢賢治を訪ねたのが、一九二九年六月だったことは間違いない。これは当時の士官学校の卒業が七月だったこととも整合する。<sup>⑤</sup>

「南京から」によれば、賢治の父宮沢政次郎から面会は五分だけといわれたので帰ろうとしたところ、「本人が是非とほせといふから」面会できた。五分を過ぎ、黄が辞去しようとする、賢治が何度も引き止め、結局「半時間」話したらしい。詩よりも宗教が主な話題となったそうだが、黄がわざわざ区隊長から特別許可をとって賢治を訪ねたのは、もちろんその文学を高く評価していたからである。他方、賢治の歓待は、賢治もまた黄の詩を評価していたことを暗に語っていよう。ちなみに一九二五年に「日本詩人」新人第一席に選ばれた詩人は、一九二四年に『春と修羅』を自費出版した賢治より、戦前は遥かに有名だった。

黄は詩集『春と修羅』（一九二四年）を早い時期に読み、感銘を受けていたという。また興味深いことに、「銅鑼」誌上で黄の詩は、「心象スケッチ」と冠された賢治の詩としばしば隣り合って掲載されている。本稿を閉ざすにあたって、足早やに黄瀛と宮沢賢治の比較を試み、彼らの文学的交流を想像してみたい。

「窓を打つ水雨」「ある夜の心象」「やるんぼうの唄」「作品八十三番」「ここまで来た時」などの黄の詩篇中には、「心象」「心象スケッチ」という賢治的語彙が記されている。すばり「心象スケッチ」というタイトルの詩もあれば、『詩と詩論』第四冊（一九二九年）に、彼が賢治のように四篇の詩を「心象スケッチ」と冠して発表した例もある。彼は賢治の影響を受け、それを公示さえしていたのだ。賢治との面会後に書かれた「春さきの風」（「詩神」一九二九年十一月号）には「宮沢賢治の病氣も全快してくれ、ばい、が」という詩句が記されている。

確かに黄の心象スケッチには、眼前の風景を、時間を追ってたどりながら、同時に風景をたどる自己の意識の流れを記述しているという点で、賢治のそれに類似している。「ここまで来た時／五十八頁の心象スケッチが停止する」という詩行は、黄が詩を書くに先立って、外界と内界の動きをリアルタイムで連続的にノートしたこと、方法論のうえで賢治に倣ったことを明かしている。

けれども、差異も目立つ。そもそも詩「ここまで来た時」は、五十八頁も記したノート自体を作品化した詩ではなく、心象スケッチの流れがふいに途絶えてしまったあとの空虚な心境の方を主題とした詩である。賢治の心象スケッチが、精神の質的な変動を、変化する風景や身体移動との相関において、連続的・重層的に描出するという特質があるのに対して、黄がいう心象スケッチは、より一時的・静的・絵画的であり、叙情詩としての結構に重きがおかれている。また賢治の自然がはらんでいる宗教性や宇宙論が、黄の人間主義的・叙情的な自然にはない。ただし、私はここでは彼らの差異を際立たせるよりも、彼らの相互理解と交流を促しただろう基本的共通性を浮かび上がらせることに努めておきたい。先に言ってしまうえば、それはまさに「書簡性と多言語性」である。

周知のように賢治の詩には、英語、ドイツ語、サンスクリット、エスペラント風の造語、外国語なまりの日本語、岩手の方言などが頻出する。科学用語や仏教用語も多く、それらは彼の科学的知識や信仰を示すばかりでなく、エキゾチックな文学的効果を發揮する。賢治には、日本領になっていたサハリンへの旅行を別にすると、外国旅行の経験がないが、彼は海外に憧れ、洋書を読み漁り、コスモポリタンの思想を抱いていた。また、東北弁を生活の言語とし、標準日本語で書いた賢治には、二言語併用者としての相貌がある。彼は差別される東北弁に関する問題意識や、中央政権から植民地化された東北に関する問題意識を作品中に書き込み、エスペラントに接近した。「宮沢賢治が日本における日本語で書かれた〈クレオール文学〉の特質を探求する上で最も重要な作家のひとりであることは、おそらく異論の余地がない」（西成彦「クレオール」、天沢退二郎編『宮沢賢治ハンドブック』）。

賢治文学の書簡性も異論の余地がない。「賢治文学は、ほとんど〈通信することの夢〉の変奏であった」（高橋世織「郵便・通信」、天沢退二郎編前掲書）。詩集『春と修羅』は、詩人を「郵便脚人」に喩えた詩「屈折率」ではじまり、童話集『注文の多い料理店』は、馬車別当が代筆した山猫の手紙（「どんぐりと山猫」）からはじまる。病死した妹トシからの「通信」を問題とした詩「青森挽歌」もある。大半の詩には日付がつけられ、しばしば親密な二人称の呼びかけや名前が記されている。

この角度から黄瀨の書簡体詩「妹への手紙(1)」「妹への手紙(2)」を改めて取り上げよう。賢治の「永訣の朝」を再

録した「銅鑼」第九号（一九二六年十一月）誌上に、「十一月二十三日。火曜の晩／天津南開大学 黄 寧声へ／お前の兄より」という後付が記された「妹への手紙(1)」は掲載されている。トーンは正反対なほど異なるとはいえ、前者は詩人が妹に「おまへ」と、後者は詩人が妹に「お前」と呼びかける。前者は詩人が瀕死の妹に贈る「ふたわんのゆき」を語り、後者は天津の妹から贈られた「毛糸の股引とキツスリンのお菓子」と妹に贈る「銀の燭台と私の写真」を語る。黄瀨と宮沢賢治の接点として、妹コンプレックスを語ることもできる。

「妹への手紙(2)」には、「永訣の朝」の有名なリフレイン「あめゆじゆとてちてけんじや」を想起させる「可愛い Ireni」というリフレインが記されている。「Ireni」は、「伊人」（あの人）を意味する中国語で、もっぱら女性に對して用いる）のことだろう。日本の一般的読者への円滑な意味伝達も、漢字の字面もあえて無視してこの語をアルファベットで綴ったのは、賢治が「あめゆじゆとてちてけんじや」という方言による妹トシの発言を、「雨雪を取って来てください」と標準語訳せず、しかもひらがなだけで表記したのと同じように、妹と自分のあいだにおける声の親密さを封印したかったためと考えられる。「けんじや」に「賢治」が暗号化されているとする解釈もある。同様のことは、「永訣の朝」のなかの妹のもう一つの方言発言の表記「(Ora Orade Shitori egumo)」(私は私ひとり往きます)についてもいえる。

「妹への手紙(2)」の末尾には、「私の一人の妹 寧声！／お兄の一人の兄 宇比雄」という宛名と署名が記されている。「ネイセイ」と読むよりも「ニンシン」と中国音で読むべきなのかもしれない。妹の名が実名であるのに対して、差し出し人である兄の名「宇比雄」は、日本人名としても中国人名としても不自然である。妹にのみ理解可能な渾名、隠語、合言葉のようなものだろうか。

黄瀨と宮沢賢治のあいだの書簡は、残念ながら未発見である。けれども、文通があったことを、黄は彼らしい観点から証言している。第一は「銅鑼」同人だった森莊巳池が黄から聞いたという間接的証言。「黄瀨とあて名をちゃんと一点一画も間違わず書く人は、二、三人しかいませんが、宮沢賢治さんは封筒いっぱい大きく、チャンとあて名を書いておりました。封筒の文字ばかりではなく、中身の手紙の文字も大きくて、芸術的で、日本人の文



字と思われぬよい文字だと、みんなで言っていましたよ」(『ふれあいの人々 宮澤賢治』)。「みんな」とは、九段坂の黄瀛宅に下宿していた中国人留学生たちだろう。もうひとつは、一九九六年に来日した黄の講演における直接的証言——「後に宮沢から一度手紙をもらいましたが、丁寧な口調で、宛名も間違いなく私の名前を書いてくれました」(『いよよ弥栄ゆる宮沢賢治』)。書簡的エクリチュールの詩人どうしならではのコミュニケーションを語る逸話というべきである。

黄瀛は宮沢賢治が会った数少ない中央の有名詩人であり、唯一の中国文人である。黄との交流の痕跡は、賢治文学のなかには刻まれていないのか。

「一九三二年度極東ビヂテリアン大会見聞録」というテクストは、一九三三年頃書かれた「ビヂテリアン大祭」という童話を、病床をたんだ賢治が東北砕石工場技師として石灰抹肥料の訪問販売をはじめた一九三一年頃、改作しかけて、結局中断したものである。「ビヂテリアン大祭」では、日本人の語り手を含む各国のベジタリアンが北米大西洋沿岸のニューファウンドランド島(ニューファンドランド島)に集って大祭を開催するが、「大会見聞録」では外国人たちが花巻温泉に宿泊してベジタリアンの大会を開くことになり、偶然同温泉に宿泊した地元人物がそれを見聞するという設定に変えられている。この新設定のモデルとして、岩手県下陸軍特別大演習を參觀する駐日本各国武官の花巻温泉宿泊(一九二八年)などの他に、黄瀛ら陸軍士官学校中華民国留学生の花巻温泉宿泊があった可能性が高いと私は見る。一九三一年九月四日という大会開催日は、満州事変(同年九月十八日勃発)の直前という含意があるようだ。しかも、「ビヂテリアン大祭」に登場する中国人は「陳」だったのに、「大会見聞録」原稿の推敲異文には、副司会者——「親交があつた」おかげで語り手が大会全体を見聞できたというキーパーソン——として「洪丁基」という中国人名が記されている。「洪丁基」(KO TEIKI)のうちには、黄瀛のフルネームがまるごと潜在しているではないか。

賢治が黄瀛と面会した際、「お会いできて光栄です」と駄洒落をいったという逸話を、佐藤竜一は黄本人から聞いたとして伝えている(『ずっぱり岩手(新版) 岩手さはまるキーワード事典』の「黄瀛」の項)。「自分は中国人

だといふことを無上の光栄に思ふた」という詩句は、この賢治のジョークに対する、私的なリスポンスという側面をもっていたのかも知れない。賢治の命日は一九三三年九月二十一日。製本に予想以上の時間を要したせいで、『瑞枝』の刊行は、賢治の死の翌年の一九三四年五月になってしまったが、当初の広告された出版予定は、黄瀨の「後記」の日付でもある一九三二年五月だった。黄は賢治が『瑞枝』を読むと思って編纂したはずである。それが、『瑞枝』の刊行を願う言葉や賢治を懐かしむ言葉を含む随筆「日本東京」に、「この文をかき終った時、宮沢賢治君の逝去の報に接した」という追記を加えるはめになったのである。

一九九六年八月、宮沢賢治生誕百年祭に黄瀨は招待されて来日し、花巻と東京で「いよよ弥栄ゆる宮沢賢治」と題した講演をした。当時、私はその東京講演（先ほどの引用はこちらからである）を聴いたのだが、タイトルにいちばん驚いてしまった記憶がある。「弥栄主義」の残響を聴いたからではない、このタイトルがすでに詩だからだ。「いよよ宮沢賢治が世界中に知れ渡る」という言祝ぎ、予祝の意味に劣らず、IYOYOIYA-YURU-MIYAとった音韻の吃音的反復が祝祭的である。そして「光栄」に通じる「栄」という文字の存在……。『いよよ弥栄ゆる宮沢賢治』とは、賢治の生前に応えそこねた賢治のジョークに対し、六十七年のスパンを通したリスポンスだったのかもしれない。黄は東京講演の最後に語っていた——「私の話は尻切れとんぼで、『いよよ弥栄ゆる宮沢賢治』。この中には何でも入っていますよ。どうか題をご覧ください（笑い）。題から皆さんの考えを、その題から話してください。それでは終わりにします」。

本稿は、このとき黄瀨から科せられたお題に対する私のリスポンスにほかならない。

#### 付記 1

二〇〇八年九月二十五日—二十六日、四川外語学院で、同学院東方語学院と同学院日本学研究所の主権による国際シンポジウム「詩人黄瀨と多文化間アイデンティティ」が開催された。本稿は、その際の筆者の二本の発表「黄瀨の光栄——宮沢賢治とのレスポンス」「宮沢賢治と花巻温泉」を骨子とした論文である。他の発表者は、王敏、

大塚常樹、勝又浩、川村湊、小池陽、黄育紅、宋再新、張曉寧、辻井喬、楊偉。諸氏の発表に刺戟を受けたことを言い添えておく。

## 付記 2

黄瀨のバイオグラフィーに関しては、主に佐藤竜一『黄瀨 その詩と数奇な生涯』、王敏『黄瀨』、『宮沢賢治大事典』、小関和弘『黄瀨』、『現代詩大事典』を参照にした。

## 《注》

- (1) 黄瀨との交友を回想する木山敏平の私小説「第三国人」を参照されたい。
- (2) 「朝の展望」や「喫茶店金水」に見られるエキゾチックなルビは、これらの詩が『瑞枝』に収録される際に削除されている。エキゾチシズムを抑制したのかもしれないが、黄瀨の詩においてある種の漢語をどう発音すべきかという問題が残る。
- (3) 正しくは「云はれた」「すゝった」。
- (4) 宋再新「黄瀨先生に聞き忘れたこと」、国際シンポジウム「詩人黄瀨と多文化間アイデンティティー」における二〇〇八年九月二十五日の口頭発表。
- (5) 『イーハトーブ温泉学』一四六頁。
- (6) 『陸軍士官学校』(第三版)、五〇頁。
- (7) 「南京から」に「詩人としての交渉は雑誌『銅鑼』で彼と伍したが、もつと古く云へば日本詩人で佐藤惣之助氏が「春と修羅」批評以前に私は彼を知つてゐる」とある。一九二四年四月に刊行された『春と修羅』に対する賞賛「十三年度の詩集」が掲載されたのは、「日本詩人」一九二四年十二月号である。
- (8) 黄瀨の自筆校正入りの『瑞枝』を所蔵している勝又浩氏からの教示によれば、黄は「お前の一人の兄」と直している。
- (9) 森は一時期九段に住んでおり、近所にいた黄瀨と頻繁に交友し、賢治と黄瀨のあいだをとりもつメッセンジャーボーイの役目を果たした。森は黄の名前をめぐるもう一つのエピソードを『ふれあいの人々 宮澤賢治』に書き残している。「黄」を中国式には「ホワン」と読むと草野心平から教えられ驚いた森は、岩手に戻ったおり、賢治にそのことを話したというのだ。

参照文献（黄瀨の詩が掲載された雑誌については省略）

黄瀨『瑞枝』復刻版、蒼土舎、一九八二年

黄瀨『景星』田村栄発行、一九三〇年

佐藤竜一『黄瀨 その詩と数奇な生涯』日本地域社会研究所、一九九四年

奥野信太郎『詩人黄瀨のこと』『日時計のある風景』文芸春秋社、一九四七年

萩原朔太郎『日本詩人九月号月旦』『萩原朔太郎全集』第八卷、筑摩書房、一九七六年

小野十三郎『黄君の日本語』『詩人黄瀨 回想篇・研究篇』蒼土舎、一九八二年

ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『千のプラトール』（宇野邦一他訳）河出書房新社、一九九四年

黄瀨『南京から』、草野心平編『宮沢賢治追悼』次郎社、一九三五年

岡村民夫『イーハトーブ温泉学』みすず書房、二〇〇八年

山崎正男責任編集『陸軍士官学校』（第三版）秋元書房、一九七三年

『花巻温泉ニュース』一九二九年七月号、一九三〇年七月号、花巻温泉株式会社

西成彦『クレオール』、天沢退二郎編『宮沢賢治ハンドブック』新書館、一九九六年

高橋世織『郵便・通信』、天沢退二郎編、前掲書

森荘巳池『ふれあいの人々 宮澤賢治』熊谷印刷出版部、一九八八年

黄瀨『いよよ弥栄ゆる宮沢賢治』『世界に広がる宮沢賢治 宮沢賢治国際研究大会記録集』vol.1 宮沢賢治学会イーハトーブ

センター、一九九七年

宮沢賢治『新校本宮澤賢治全集』第十卷、筑摩書房、一九九五年

佐藤竜一他『ずっぱり岩手（新版） 岩手さはまるキーワード事典』熊谷印刷出版部、二〇〇七年

黄瀨『日本東京』『詩人時代』第三卷第十二号、一九三三年十二月一日、『新校本宮澤賢治全集』第十六卷（下）、筑摩書房、

二〇〇一年

渡部芳紀編『宮沢賢治大事典』勉誠社、二〇〇七年

安藤元雄他監修『現代詩大事典』三省堂、二〇〇八年

（表象文化論・国際文化学部教授）